

帝国理念の交錯 ―カール戴冠再考―

五十嵐 修

キーワード：カール大帝 皇帝 戴冠式 カロリング朝 フランク

Charlemagne, emperor, coronation, Carolingian, Frankish

はじめに

1965年にカール大帝¹列聖800年を祝って浩瀚な記念論集が編纂され、この4巻からなる論集が今日のカール大帝研究の出発点になっているのは、周知の通りである²が、ここ数年相次いでカール大帝に関する記念論集が編纂され、新しい知見がつけ加えられている。1994年にはフランクフルト市誕生1200年を祝って展覧会が開催され、カール大帝に関する記念論集が発行された³。さらに1999年にはパーダーボルンで、カール戴冠への道を切り拓いた、カールとローマ教皇レオ3世の歴史的な会見を記念して、展覧会が開催され、3巻からなる大部の研究書が公刊された⁴。1965年の論集とは異なって、この論集は「展覧会の解説書」という色彩が濃いのであるが、一流の研究者がそれぞれの与えられたテーマに関して興味深い小論を載せている。さらに、一昨年もカール戴冠1200年を記念してアーヘンで新たに展覧会が開催され、展覧会の目録が出版されている⁵。

このように近年、矢継ぎ早に展覧会が開かれ、またカール大帝に関する記念論集が出版されているが、カールに関する啓蒙書も最近続々と出版されている。1998年にイギリスの研究者R・コリンズによるすばらしい伝記が出版された⁶が、昨年、フランスでもカールの伝記が出版されたし⁷、ドイツにおいてもカール大帝伝が相次いで出版されている⁸。カール大帝への関心はここ数年ヨーロッパで確実に高まっているのである。

理由ははっきりしている。ヨーロッパの人々はカール大帝にヨーロッパの統一性の記憶を探りだそうとしているのである。今日のヨーロッパ諸国家が未だ姿を見せていなかった時代にあって、西ヨーロッパの大部分を領有しただけではなく、皇帝戴冠によって、ヨーロッパの政治的統合の可能性を後世に伝えたカール大帝は、ヨーロッパ統合のシンボリック存在なのである。それゆえ、ヨーロッパ統合の機運が高まった今日において、今から1200年も前に生きていた一人の君主が再び脚光を浴びることになったわけである⁹。

ところで、わが国ではどうだろうか。カール大帝は高校の世界史の教科書には必ず登場し、ヨーロッパ史にける代表的な王のひとりと認められているといってよい。ところが、カール大帝に関する研究は不思議なほど少ない。カールの皇帝戴冠に関する本格的な研究も、数点を数えるのみである¹⁰。本稿の目的はこの重大な欠陥を埋め、ヨーロッパ史におけるカール戴冠の

意味を再考することである。

1 研究の現状と問題点

当然のことながら、カールの皇帝戴冠に関して非常に多くの研究が存在する¹¹。有名なものを挙げていけば、1902年の公刊されたヘルトマンの著作をはじめ、今世紀中葉に発表された、シュラム、フィテナウ、ガンスホーフらの業績¹²、バランスのとれた叙述として今なお名高いフォルツの著作¹³、ビザンツとの関係を特に視野に入れることによって戴冠研究に新境地を拓いたクラッセンの遺稿¹⁴などを挙げることができるだろう。

最も重要な争点は、皇帝戴冠のもととなった帝国理念をどう理解するかという点である。フィヒテナウ、シュラム、フォルツ、エーヴィヒらはキリスト教の要素を特に強調する¹⁵。その際、これらの研究者に重要なアイデアを提供したのが、1934年に発表された『中世初期の典礼におけるローマ的帝国理念とキリスト教的帝国理念』と題するテレンバッハの画期的な論考である¹⁶。この論文のなかでテレンバッハは、8世紀中葉以降、「ローマ皇帝」という表現が時代錯誤だとして典礼の章句の中から削除されたことを指摘する。そして、具体例として、8世紀末に、ザンクトガレン修道院で聖金曜日の祈祷の章句が「ローマ帝国」から「キリスト教帝国」に変えられた事実を挙げている¹⁷。典礼史料という新しいジャンルの史料を用い、中世初期の帝国理念の変貌過程をあざやかに描き出したこの論文は、その後の多くの論文に多大な影響を及ぼしたといつてよい。また、カール大帝の有力なブレーンであったアルクインは、800年のカール戴冠以前から「キリスト教帝国」という表現を折りに触れて用いており、この点からも、「キリスト教帝国」というヴィジョンが、カールの皇帝戴冠に決定的な役割を演じたのではないかと考える主張が補強される。

しかし、別の解釈もある。

例えば、シュテンゲルは単に覇権を意味するだけの、「非ローマ的帝国理念」の存在を主張し、論拠のひとつをアングロサクソンの *bretwalda* に求めた¹⁸。この主張はその後の研究者によって批判されたが¹⁹、新たな分析概念を産み出す契機となった。その新たな分析概念とは、「ローマ的皇帝理念」と「非ローマ的皇帝理念」という対概念である。これを最初に主張したのがC・エルトマンである。エルトマンは「非ローマ的皇帝理念」という概念を用いて中世初期の帝国理念を分析しようと試みた。彼は、「非ローマ的皇帝理念」と題する著名な論文において、ひとつの見取り図を呈示している²⁰。この論文において、エルトマンはまず「ゲルマン的皇帝権は存在したか？」という問題を取り上げて、シュテンゲル説を検討する。そして次いで第2節の「アーヘンの皇帝理念」で、カール大帝の皇帝理念を検証する。エルトマンは「非ローマ的」な帝国理念の存在を想定することで、この時代の帝国理念を整理しようと試みた。

最近の研究として興味深いのが、H.メイヤー＝ハーティングの論文である。彼は、論文の冒

頭で自分のテーゼを簡潔に次のように述べている。「カールが800年の皇帝戴冠を必要としたのは、ザクセン人の貴族を屈服させた後、彼の支配を正当化し、受け入れさせるための唯一の概念的な枠組であったからである」²¹。この仮説は彼自身が認めているように、裏づけを欠いている。皇帝戴冠の少し前にカールがザクセン問題に没頭していたのは事実であるが、ザクセン支配を安定的に支配するために皇帝戴冠をめざしたという彼の仮説は空想の域を出ない。しかし、カールの皇帝戴冠をめぐる問題の解釈に、新しい連関の可能性を示唆した点は評価しなければならない。

J. フリートの最近の論考も示唆に富む。フリートは、かつてH. レーヴェがとりあげた『ケルンの覚え書』を再評価し、カールの皇帝戴冠の前提として、皇帝戴冠の数年前からのビザンツとフランク宮廷の外交関係に着目すべきだと主張する²²。この『ケルンの覚え書』には、798年にビザンツから使者がやってきて、「皇帝権 (*imperium*) をカールに差し出した」という簡潔なメモ書きがみられるが、フリートはこの史料は十分信頼できると考える。「皇帝権をカールに差し出した」という表現が具体的に何を意味するのかわからないが、イレネがカールに対して何らかの譲歩を示し、それがフランク宮廷において「皇帝権」(*imperium*) の譲渡と受けとめられたのではないかと、という。そして、このようなビザンツとの外交交渉がカールの皇帝戴冠に大きな役割を演じたのではないかと彼は考えている。

さて、簡単に研究史を概観したが、私は従来の研究にはひとつの大きな欠落があると思う。その欠落とは、従来の研究が戴冠以前のカールの統治理念と皇帝戴冠との連関を十分に考えてこなかったことである。789年の『一般訓令』の中で明示されているように、カールの治世の特徴は、王権を中心とするテオクラシーの確立を目指したことにある。カールは有能な聖職者をブレンとして登用し、宗教を根幹に据えた新しい国家の形成を統治目標に掲げた。カールは旧約聖書の王権をモデルとして、宗教にもとづく国づくりをめざした。そしてその際、後述するように、民衆教化、異教徒との戦い（聖戦）、異端の撲滅の三つが統治政策の重要課題とみなされていた。戴冠以前のカールの重要な統治政策（たとえば、「カロリング・ルネサンス」、ザクセン戦争、アヴァール戦争、対ランゴバルト戦争といった聖戦、そしてキリスト養子説および聖画像問題といった「異端」に対するカールの強硬姿勢）は、概してこのような観点から理解することができる。そして、この政治理念の存在こそが、カールの皇帝戴冠において、非常に重要な役割を演じたのではないだろうか。それは特に次の二点において、大きな役割を果たしたと思う。第一は、カールが信仰の擁護者を自任したがゆえに、ビザンツと決定的な対立関係に陥ったことである。第二は、この基本政策が展開された結果、「キリスト教帝国」というアイデアが生まれ、このアイデアが皇帝戴冠を可能にしたと思えることである。カールの皇帝戴冠は、この統治理念の到達点であったと解釈することも可能ではないだろうか。

もちろん、ローマ教皇座がカール戴冠に果たした大きな役割を軽視するつもりはない。以上

に述べたように780年代以降のフランク宮廷の宗教的な統治理念の進展がカール戴冠を背後から支えた重要な理念であったとしても、カールの皇帝戴冠の最も大きな原動力はいうまでもなくローマ教皇であった。カールの皇帝戴冠は、当時窮地にあった教皇レオ3世が起死回生の策として練り上げた策略としての側面も持っている。皇帝戴冠を仕掛けたのは明らかに教皇のほうであった。苦境にあった教皇は、カールの力を頼りにしていた。ローマ教皇がカールの力を最大限に活用しようと考えた結果が、カールの皇帝戴冠に他ならなかった。では、なぜレオはカールに皇帝戴冠を進言したのか。それは、あの有名な偽文書、『コンスタンティヌスの定め』に含まれる政治理念が当時の教皇座に脈々と流れていたからではないだろうか。

以上の仮説が正しいとするならば、カールの皇帝戴冠は、780年代から加速度的に進展したフランク宮廷の新しい統治理念と教皇座の政治理念の融合点として理解されなくてはならないだろう。

私は、本稿において、このような視角からカール戴冠の再解釈を試みたい²³。

2 民衆教化・聖戦・異端の撲滅 ― 戴冠への道 ―

カールの統治理念は、カールの最も有力なブレインのひとりであったアルクインの書簡のなかに明瞭に認めることができる。たとえば、ある書簡のなかで、アルクインは次のように述べている。「陛下が聖なる志をもち、神より託された権力を用いることにより、使徒から継承したカトリック信仰をいかなる場合にも擁護せられんことを。また、勇敢に戦って＜キリスト帝国＞を拡大し、使徒から継承した真の信仰を守り、教え、伝道するように努め給わんことを」²⁴。ここには、正統信仰の擁護（異端の撲滅）、民衆教化、異教徒の改宗の三点がはっきりと述べられている。アルクインは、王権は神から託された権力であるとはっきり認識していた。その結果、キリスト教信仰を王国内の人々に浸透させ（民衆教化）、また正統信仰を擁護するために異端を撲滅し、また異教徒をキリスト教に帰依させることが、王権の重要な任務であると考えた。そして、これはおそらくカール自身の理解でもあった²⁵。

実はこの書簡は800年の6月頃、すなわちカール戴冠の半年前に書かれたものである。となると、このような統治理念はカールの皇帝戴冠の間際になって急に浮上してきたものと思われるかもしれない。しかし、そうではない。たとえば、794年から翌年にかけての時期に書かれたと思われる書簡のなかで、アルクインは次のようなことばを残している。「指導者（*rector*）にして唱導者（*praedicator*）であるカールを上にご頂く民は幸いです。王は、勝利をもたらす力をもつ剣とカトリックの教えを響かせるラッパを操ります。また、王は聖書のダビデを模範として、勝利の剣で諸民族を服属させ、神の法の唱導者として人々の前に現れています。王の庇護のもと、キリストの民は安寧を得、また、すべての異教の民に恐れられているのです」²⁶。

アルクインはここでダビデを引きつつ、王権の役割を指摘している。彼にいわせれば、フラ

ンク王国はキリスト教を根幹とする国家である。それゆえ、その根幹が動揺すれば、国家そのものが危機に陥るのである。王は信仰の問題に深く配慮しなければならない。信仰の問題を熟慮し、必要があれば具体的な行動をおこすことは、君主の務めである。アルクインはいう。カールは国内の異端者から教会を守り、また国外の異教徒と戦うための二振りの剣を持っているのだ。

カトリック信仰の擁護（異端の撲滅）、民衆教化、異教徒の改宗という三つの課題に関して、カールが780年以降、具体的にどのように取り組んだかを簡単に述べてみたい。

まず、カールが民衆教化の問題を非常に重要視していたことは、789年に発布された『一般訓令』のなかにもみることができる。82条にも及ぶこの勅令は、皇帝戴冠以前のカールの施政方針を示した記念碑的文書である²⁷。カールはこの文書の序文において、自らを旧約聖書の『列王伝』に登場するユダの王ヨシヤに例えている。ヨシヤは新たに発見された「律法の書」に基づいて、偶像崇拜を根絶させ、宗教改革をおこなった人物である。聖書には「彼のように全くモーセの律法に従って、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして主に立ち帰った王は、彼の前にはなかった。彼の後にも、彼のような王が立つことはなかった」（列王伝下23・25）と記されている。カールはフランク王国のヨシヤになろうとした。カールとそのブレンたちから見れば、フランク王国はキリスト教国だとはいえ、なおキリスト教の教えが隔々まで行き渡っているとはいいがたく、また教会の教える道徳が遵守されていたわけではなかった。このような状況のなかで、かれは高い理想を掲げた。カールは宣言する。「聖なるヨシヤが、巡幸し、正し、訓戒を与えることによって、神から託された王国をいかに真の神への信仰に立ち返らせようと努めたかを、私は『列王伝』で読んで知っている。私はこのような聖なる人に、とうてい及ばない。しかし、聖なる人々の模範にしたがい、わが主イエス・キリストの栄光をたたえるために善き生活を送るように、できるかぎり多くの人々を導くのは、私の務めである」²⁸。

フランク王国に属するすべての者がキリスト教の精神をよく理解し、キリスト教の理念にもとづいた日常生活を送るようになることが、カールと周囲の聖職者たちの理想であった。『一般訓令』のどの部分をとっても宗教と無関係なものはない。カールは理想に近づくためには、特に教育が重要であると考えていた。第72章で学校の設立を司祭に促しているのもそのためである。また、『一般訓令』の三つの章で説教の問題が取り上げられていることも、宗教教育に対するカールの強い関心の現れである。カールとその側近たちは、民衆教化の問題がきわめて重要な政治課題であると認識していた。『一般訓令』の最後の二章において、すべてのキリスト教徒が遵守し、また留意すべき重要な条項が掲げられていることも、このような統治理念を反映している。民衆教化は、キリスト教にもとづく国家を基礎づけるために最も重要な政策のひとつであると意識されていたのである。

次に異教徒の改宗について述べよう。カールがかなり早い時期から異教徒の改宗に大きな関心をもっていたことは、ザクセン戦争から知ることができる。

カールが異教徒であるザクセン人に抱いていた感情は、アインハルトの有名な『カール大帝伝』から推察される。アインハルトはザクセン人について次のように書いている。「ザクセン人は、ゲルマニアに住むほとんどすべての民族と同様に、生まれつき獐猛で、悪魔の崇拝に身を捧げ、われわれの宗教に反感を抱き、神と人間の法を汚しても蹂躪しても不名誉とは思っていなかった」²⁹。当初から、カールは、ザクセンに対する戦いは宗教戦争であると強く意識していた。カールがエレスブルクにあった「イルミン聖柱」を破壊していることは、彼がこの戦争を宗教戦争として最初から意識していたことを示すものである³⁰。「イルミン聖柱」とは一本の聖なる高い木であり、ザクセン人はこの木を神のごとく敬っていた。カールはその木を倒したのである。カールはすでにザクセン戦争の初期段階から「聖戦の思想」をもっていたように思われる。

「聖戦の思想」は、790年頃のアルクインの思想のなかに明確に認められる³¹。アルクインは790年に、あるイングランドの聖職者に宛てた書簡のなかで、カールの軍事的な成功について次のように書いている。「まず、最初にあなたは神の恩寵により、神の聖なる教会がヨーロッパで平和と前進と成果を得たことを知らなくてはなりません。なぜなら、旧サクソン人（ザクセン人）とすべてのフリースラント人が国王カールの努力によって、キリスト教信仰に改宗したからです。王は飴と鞭でこのことを達成しました。また、昨年には、同じ王がヴェンド人と呼ばれるスラヴ人を攻略し、支配下に置きました。さらに二年前にギリシャ人が海上からイタリアに侵入しましたが、王〔カール大帝〕の家臣たちによって討たれ、自分たちの船に逃げ帰りました。四千人の兵士が殺され、千人が捕虜になったと聞きます。同じように、フン族とも呼ばれるアヴァール人がイタリアを荒らしましたが、キリスト教徒に敗れ、恥辱のうちに本国に戻りました。彼らはまたバイエルンも襲いましたが、キリスト教の軍隊 (*exercitus christianus*) に敗れ、ちりじりになりました。キリスト教徒のこの偉大なる国王の家臣たちは、サラセン人からイスパニアの広大な沿岸地帯を三百マイルにもわたって奪取しました」³²。

アルクインの考えでは、カールの戦争はキリスト教と異教徒の戦いであった。カールはキリスト教世界の、より正確に言えば、カトリック世界の、——そしてそれは当時の理解におけるヨーロッパに他ならないが——もっとも偉大な君主であった。アルクインによれば、カールはキリスト教世界の最高の指導者としての立場から、周囲の異教徒と戦い、またザクセン人やアヴァール人を改宗させたのである。アルクインはこの書簡のなかで、フランクの軍隊を「キリスト教の軍隊」と呼んだ。アルクインからみれば、カールの戦いは宣教のための「聖戦」に他ならなかった。

アルクインはカールに宛てて、こう書いている。「すべての神の教会は一致して全能なる神に感謝の気持ちを捧げなければなりません。全能なる神こそが、このような危機の時に、人々を治め、守ってくださる敬虔で賢く、公明正大な君主をお与えくださったのです。王は、全力を挙げて正しくない教説を払いのけ、広大な地域に神の名を広めることを喜び、地の果てまでも

カトリックの信仰の光を灯そうと努力しているのです」³³。アルクインは、フランク王国の拡大をカトリック世界の拡大と同一視し、カールの行動を称えた。このように、アルクインは790年以降の書簡のなかで、「聖戦の思想」を表明している。そして、おそらくそれは、この時期のフランク宮廷の公式見解ともなっていたのである。次節で述べる『カールの書』にも、カールが異教徒を改宗させたことが誇らしげに述べられている³⁴。カールは、キリスト教世界の拡大は自分に与えられた重要な任務であると意識していた。

第三に、カールはカトリック信仰の擁護のためにも積極的な役割を果たそうとした。カールは信仰の擁護者として、おもに三つの問題で大きな役割を果たした。三つの問題とは、次の三つの神学的な論争である。まず第一は、イスパニアで広まったキリスト養子説である。この異端的な神学に対して、カールはローマ教皇とともに積極的に反応し、かつ対策を講じ、カトリック信仰の擁護に努めた。第二は、聖画像（イコン）崇拝論争である。東ローマ帝国で展開された、この著名な神学論争は東ローマ帝国に大きな混乱を引き起こしただけでなく、東方キリスト教世界と西方キリスト教世界の亀裂を露呈するものとなった。カトリック信仰の擁護者を自任するフランク宮廷は、東ローマ帝国のキリスト教信仰を激しく非難した。第三の＜フィリオクエ＞論争も、東西キリスト教世界の乖離を指し示す。カールはこの論争でも重要な役割を演じた³⁵。

以上に述べたように、宗教はカールの統治政策の根幹を占めた。アルクインの書簡にあらわれる＜キリスト教の擁護、民衆教化、異教徒の改宗＞は、カールの基本政策であった。カールにとって、政教一致の旧約聖書の王権こそが、理想とすべきモデルであった。そして、この思想は明確に780年代にまで遡ることが可能である。カールの戴冠の十年以上前から、カールの宮廷においては、宗教を中心にした国づくりの推進が基本政策となっていたのである。

この基本政策は、次の二つの点において、皇帝戴冠への道を切り拓いたように思われる。第一は、ビザンツとの対抗意識の深化という側面である。カールはキリスト教世界の最高の指導者であるという自覚を深めていったが、その結果として、必然的にビザンツとの対抗意識が先鋭化した。キリスト教世界の最高指導者である自分が王の地位にあるのに、ビザンツの君主が皇帝と称していることは不当ではないだろうか。このような疑問が沸いてきたとしても不思議ではない。第二は、フランク宮廷における「キリスト教帝国」理念の形成という側面である。フランク王国はキリスト教国に他ならないという理解は、王国の存在を宗教的次元にまで昇華させていった。もはやフランク王国は単なる国家ではなかった。この国は、キリスト教の発展と不可分の関係にある唯一無比の国家であり、正統信仰を擁護するための中核であると認識されるようになった。このような意識の浸透が、後に述べる「キリスト教帝国」の理念を生み出したものと思われる。もちろん、この理念は本来、現実のカールの皇帝戴冠とは無関係であった。けれども、ローマ教皇座との交渉過程のなかで、この理念は現実の「キリスト教帝国」の

形成をもたらすための理論的前提のひとつとなったと考えられるのである。

3 ビザンツとの対抗意識の醸成

実は780年代後半にいたるまで、フランクとビザンツは決定的な対立関係に陥ってはいなかった。このことは特に強調しておく必要がある。周知のように、ビザンツはレオン3世の治世以降、イコノクラスムを国是とし、教義上ローマ教皇座と鋭く対立するにいたった。また、774年にカールがランゴバルト王国を滅ぼし、ビザンツの直接的な隣人となって以来、当然のことながら、フランクとビザンツの関係は緊迫した。にもかかわらず、フランクとビザンツは完全な敵対関係にはなかった。そのことを明確に示すのがビザンツ皇帝コンスタンティノス6世とカールの娘ロトルーデの婚約である³⁶。781年の4月に、皇帝の母イレネは、ちょうどローマに滞在していたカールのもとに使者を送り、結婚の取り決めが行われた。この婚約は786年に破棄されるまで有効であった。すなわち、聖画像問題という教義上の重要な対立を抱えていたにもかかわらず、カールは政治状況を勘案し、この時点ではビザンツとの和平の道を選んでいたのである。この事実は、フランク宮廷において780年代中頃までは、ビザンツ皇帝を異端者として断罪する考え方がまだ生じていなかったことを示している。そうでなければ、なぜカールが異端者に自分の娘を嫁がせることに同意しようか。

けれども、780年代末になると、状況は明らかに変わる。フランク宮廷では前節で述べた基本理念が支配的となり、ビザンツを批判する機運が高まった。

790年頃に書かれたと思われる『カールの書』(リブリ・カロリーニ)ほど、この時期のフランク宮廷の立場を明確に示しているものはない³⁷。この文書が787年にビザンツで開催されたニケーア公会議の決議に対するフランク宮廷の直接的な反応であり、聖画像問題に関するフランク宮廷の公式見解を表明したものであることはよく知られているが、この文書の意義は単なる教義論争の問題にとどまらない。カールは、この文書のなかで、ビザンツ皇帝を中心とする東方教会に対して、西方教会の代表者として、西方教会の立場を表明し、東方教会を激しく攻撃した。この文書には、カトリックの支柱としてのフランク宮廷の立場が明確に示されるとともに、ビザンツへの対抗意識が浮き彫りにされている。

787年のニケーア公会議といえば、ビザンツの女帝イレネが聖画像論争に終止符を打つために開催した教会会議であり、聖画像の価値を再評価した会議である。この会議にはローマ教皇の使節も列席しており、ローマ教皇はこの教会会議の決議を伝統への回帰を示すものとして高く評価した。つまり、787年のこの会議の結果、聖画像問題に関する東方教会と西方教会の亀裂は修復され、教義上の齟齬は解消されたはずであった。少なくとも、ローマ教皇はそう理解していた。しかし、フランク宮廷はそう考えなかった。もともとギリシャ語で書かれていた決議録の内容を、おそらくローマ教皇に近い聖職者の不正確なラテン語訳によって知っ

たフランク宮廷は³⁸、このラテン語訳に激昂し³⁹、ビザンツへの対抗意識をむき出しに、フランク国王こそがキリスト教の真の信仰の擁護者であることを声高に叫ぼうとした。E・エーヴィヒが『カールの書』がローマの首位権を強調すると同時に、ローマ教皇の同意のもとになされたニケーア公会議の決議に異議を唱えたのは、皮肉というほかはない」と述べているのは、この文書を考えるうえで示唆的である⁴⁰。フランク宮廷は、この機会をとらえて、自己の立場を鮮明にしようと考えたのである。ローマ教皇座との立場の相違がこの文書の中で鮮烈に表現されている。

この文書はカールの名のもとに作成されたが、実際の執筆者はイスパニア出身の聖職者テオドルフであったといわれる⁴¹。まず、この文書の作成に先立って、ニケーア公会議に反駁する文書が宮廷で早急に作成され、カールの信任篤いアンギルベルトに託されて、792年にハドリアヌスのもとに送付された⁴²。フランク宮廷の強硬な態度に驚愕したローマ教皇は、フランク宮廷の誤解を解くように努力したと思われる⁴³。けれども、フランク宮廷は当初の意図を変えることなく、さらに公式文書の作成を急いだ。793年にイングランドから帰国したアルクインも、この文書の完成に関わったかもしれない⁴⁴。しかし、この文書は公式にはついに発表されなかった。カールも宮廷聖職者たちも、教皇との決定的な亀裂を避けるために、この文書を公にしないことを最終的に決断せざるをえなかった。『カールの書』と一般によばれているこの文書の写本の数がきわめて少なく、断片的に伝承されている写本を含めてもわずか三点を数えるだけであるのはそのためである⁴⁵。にもかかわらず、この文書には当時のフランク宮廷の基本姿勢が明確に示されている。ここには、ビザンツに対する強烈な対抗意識が溢れている⁴⁶。

『カールの書』の序文では、次のように述べられている。「我々は王国内の教会の指導を神から授かったのであるから、神の加護のもと、その保護と発展のために尽力しなければならない」⁴⁷。ここには信仰の擁護者としてのカロリング宮廷の立場が明確に示されている。彼らからみれば、ビザンツ皇帝の所業はカトリックに反し、神の御意にそむくものであった。序文を読むと、フランク宮廷にとって聖画像問題は口実にすぎず、異端的なビザンツに対して、キリスト教世界における自己の正統的な立場を示すことこそ、重要な論点であったのではないかという印象すら受ける。実際、たとえば、第一書の第一節で扱われている問題は、聖画像問題ではない。この節の目的は、ビザンツ宮廷がローマ教皇ハドリアヌスに送った書簡のなかにあった、「われわれとともに統治する神によって」という文言に対する批判にあった。フランク宮廷からみれば、「われわれとともに統治する神によって」という表現はビザンツ宮廷の傲慢な態度を示すものであった⁴⁸。さらに、続く第二節でも、ビザンツ皇帝コンスタンティノスとイレネの名で教皇に送られた書簡の中に「神の栄光を真に探し求める我々を神が選んだ」という表現があったことに、過敏に反応し、反撃を加えている。第三節でも同様の攻撃が続く。今度は、ビザンツ皇帝が彼らの公式書簡の中で「神の」(*divalia*)という表現を自分の称号のなかにつけ加えてい

ることを問題にする。そのような表現はビザンツ宮廷の神をも恐れぬ傲慢な態度を示すものであると、フランク宮廷は考えた。フランク宮廷はビザンツの皇帝教皇主義的な立場を激しく攻撃するのである。さらに第四節においてもビザンツ皇帝の書簡の表現をとらえて、ビザンツ宮廷のキリスト教理解がいかに正しくないかを明らかにしようとする⁴⁹。使徒以来の伝統を継承するローマ教会が教義に関して最も大きな権威を持っていることを主張する第六節をはさんで、聖画像問題が扱われるのは、ようやく第七節においてである。

前節で述べたように、780年代後半に〈民衆教化、異端の撲滅、異教徒の改宗〉を国家理念の基本に据え、キリスト教世界の盟主としての立場を自覚するようになったカールにとって、ビザンツ皇帝との対立は不可避であった。フランク王国とビザンツの対立は単なる覇権争いではなかった。ビザンツ皇帝との対立は、カールの統治理念の根幹から生じる不可避の事態であったと理解しなくてはならない。ビザンツ宮廷の宗教的立場は、フランク宮廷には承服しがたいものであった。フランク宮廷にとって、ビザンツ皇帝は打倒すべき異端の信奉者に他ならなかったのである。

以上に述べた780年代のフランク宮廷における「キリスト教世界の盟主」としての自己理解の確立と、その自己理解から必然的に導き出されたビザンツとの対抗意識の醸成は、新しくローマ教皇に選ばれたレオ3世に宛てて796年に送られたカールの書簡のなかで、はっきり表現されている。この書簡のなかでカールは次のようなことを述べている。

「余の務めは、侵入しようとする異教徒を追い払い、信仰薄き者たちの策動を鎮めて、キリストの聖なる教会を外から守り、また、正統なる教えをあまねく行き渡らせることで、内側から教会を強化することにある。それに対して、ローマ教皇の務めは、キリスト教の民が、いついかなる場合にも敵たちに対して勝利をおさめ、わが主イエス・キリストの御名が世界にあまねく輝くように、神に手を差し伸べて、余の戦いを助けることにある」⁵⁰。

この書簡のカールは、自信に満ちあふれている。教皇の仕事は祈ることであり、他の仕事は自分に任せろというのである。この書簡でのカールは、キリスト教世界の最高指導者である。キリスト教世界という宗教共同体の指導者はローマ教皇と自分である。確かに聖ペトロの後継者であるローマ教皇は、この世界の最高の宗教的権威者である。しかし、実際にこの世界を守り、指導していくのは、このキリスト教世界の大部分を直接自分の支配下におさめている自分である。実際に異教徒と戦って正統信仰を広め、また教会を社会に根付かせようと政治的手段を用いて尽力しているのは自分なのだ。

皇帝戴冠の4年前にすでに、キリスト教世界の最高指導者という自己理解がカールとフランク宮廷において確立していたことは、注目されてよい。

4 ローマ教皇座の混乱

カール戴冠の直接的な契機となったのは、教皇座の内紛であった。

教皇座の混乱は遅くとも 798 年には表面化し、フランク宮廷にも知られるようになった⁵¹。この混乱の中心人物は前教皇ハドリアヌスの甥で、教皇座で *primicerius* (書記長) の地位に就いていたパスカーリスと *sacellarius* (財務長官) の職にあったカンブルスであった。また、同時に非常に多くのローマの貴族たちが関わっていた⁵²。レオの教皇就任を喜ばないローマの貴族グループはレオの不品行を非難し、レオの廃位を画策した。

運命的な事件は 799 年の 4 月 25 日におこった⁵³。この日、レオは恒例の大祈願祭の行列のためにローマ市内を巡幸していた。そして、突然反対派に襲われた。教皇は馬から落とされた。陰謀者たちは、教皇を失明させ、また舌を抜こうとした。そして、教会に連れ込み、さらに暴行を加えた。『ローマ教皇列伝』によれば、レオは「祭壇の前で悶絶し、血だらけになっていた」⁵⁴。そして、その後レオは修道院に幽閉された。このレオ幽閉事件が白昼堂々で行われたことを思えば、この凶行には多くの支持者があったことは明白である。しかし、不思議なことにこの計略は失敗におわった。レオは側近アルビヌスらの手によって修道院から救出されたが、レオはそのとき話すこともできたし、見ることもできたのである。カールの勅使としてローマに滞在していたスタプロ修道院長ヴィールントとスポレット公ヴィニギスの助力で、レオは夜陰に乗じて、ローマを脱出し、スポレットに逃れた⁵⁵。教会分裂の危機に陥ったレオは、カールを頼みにせざるをえなかった。

この醜目すべき事件は、ただちにカールの耳に届いた。王はすぐにケルン大司教で王室礼拝堂司祭長でもあったヒルデバルトをイタリアに派遣した⁵⁶。また、カールはそれをアルクインに知らせた⁵⁷。カールはこの事件を知ると、ただちにローマに向かおうとしたと伝える史料もあるが⁵⁸、実際には彼はローマには行かなかった。そして、6 月に入ると、ザクセンの反乱を鎮めるために、ザクセンへ出かけてしまった⁵⁹。おそらく、ローマの情勢を冷静に分析し、今後の方策を慎重に検討する必要性を感じていたのであろう。

ところで、アルクインがこの頃にカールに宛てて書いた書簡の有名な一節を引用したい。教皇レオ襲撃のニュースをカールから知らされたアルクインは、この注目すべき書簡のなかで次のように述べている。

「これまでに三人の人物がこの世の秩序の頂点にありました。一人は使徒の崇高さを代表し、使徒のなかのプリンス、至福なるペテロの代理人としてその座にある人物であります。陛下はご親切にも、その人物に起こった事件をお教え下さいました。他の一人は皇帝の称号を認められ、第二のローマで世俗権を行使していた人物であります。周知のごとく帝国の頭たるこの人物は、神に唾する仕方、異邦人によってではなく臣下と同胞によって廃位させられてしまいました。残りの一人は我らの主、イエズス・キリストからキリスト教の民人を統べるべく王の

権威を授けられた人物であります。この権威は賢明さにおいて他の二つの権威を圧倒し、凌駕します。いまやキリストの教会が頼ることができるのは陛下だけであります。キリストの教会を救えるのは、罪を犯した者を罰し、過ちを犯した者を教導し、悲嘆に暮れる者を慰め、善事を推進なさる陛下だけなのであります」⁶⁰。

教皇座の混乱が明らかになったことによって、カールこそはキリスト教世界の ―アルクインの表現を用いれば、「キリスト教帝国」(*imperium christianum*)― の最高指導者であるという考え方が、さらに説得力を増したと思われることは注目されてよい。

さて、苦境に陥ったレオは、カールに直接謁見し、王の援助を求める以外にローマでの勢力巻き返しをはかる方法はない、と考えた。レオはスポレットを発って、カールのザクセン支配の拠点であったパーダーボルンに向かった。レオは799年の7月にパーダーボルンに到着した。カールは王子ピピンを教皇を出迎えるために遣わし、レオを今なお正式に教皇の地位にある人物として歓待した⁶¹。

数日間に及ぶ会談のなかで、レオがカールに皇帝戴冠を要請したのではないかと推測する研究者は、少なくない⁶²。そのように推測される理由は、この後、カールが皇帝に戴冠される800年の秋以降のローマ滞在のときにいたるまで、二人が直接会談のときをもつ機会がなく、また、皇帝戴冠の問題に関するいかなる公式文書も書簡も残されていないことにある。この時に両者の間でこの問題が話し合われたか、あるいは、カールがローマに赴いた800年の秋に協議されたかのどちらかであると推定せざるをえないのである。しかし、800年の秋になってはじめて、レオが皇帝戴冠をカールに提案したとは考えづらい。なぜなら、後で述べるように、この800年のカールのローマ遠征において、レオがカールを皇帝として遇して出迎えていることがよく知られているからである⁶³。それゆえ、パーダーボルンで、皇帝戴冠の問題が討議された蓋然性は高いという推定が導き出されているのである。「カール王のもとに逃れたレオは、もし敵からわが身を守ってくれるならば、皇帝の冠を授けようと王に約束した」という『ナポリ司教事績録』の記述は、ひょっとすると確かな史料にもとづいて書かれたものであるかもしれない⁶⁴。当然ながら、「この時カールは「皇帝」と「アウグストゥス」の称号を受け取った。カールは最初、固辞した。もし教皇の意図を予め知っていたのならば、たとえ特別な祝祭であったとしても、教会に足を踏み入れることはなかったであろうと断言したほどであった」⁶⁵という、800年12月25日の運命的な出来事に関するアインハルトのあまりに高名な叙述を文字通りに受けとめて、カールとフランク宮廷は直前にいたるまで皇帝戴冠を全く知らなかったのだと考えるわけにはいくまい。アインハルトの叙述は、文学的な表現にすぎないと解釈すべきであろう⁶⁶。

ところで、なぜ、レオは皇帝戴冠の話を持ち出したのか、また、それはレオにとってどのような意味があったのだろうか。この疑問に答えるためには、8世紀のローマ教皇座の政治理念を理解しなくてはならない。

5 『コンスタンティヌスの定め』とローマ教皇座の政治理念

800年以前の教皇座における政治理念を検討するための史料は主に二つある。ひとつはレオがラテラノ宮殿に描かせたモザイク画であり、もうひとつは有名な偽文書『コンスタンティヌスの定め』である。

まず、このモザイク画について述べたい。797年かその翌年頃に、レオ3世は、建設を命じていたラテラノ宮殿の謁見の間にカールと自分の姿を描かせた。残念なことに本物は18世紀の移築の際に破壊されてしまったが、1743年に教皇ベネディクトゥス14世が新たに建設させたものが現存している。また、17世紀の模写も伝承されている。このモザイク画の中央には聖ペトロが大きく描かれ、その左右にカールとレオが描かれている。カールの肩書はまだ王であり、このモザイク画が800年の戴冠以前に描かれたものであることを明確に示している。興味深いのは、ペトロの下に書かれている文である。「聖ペトロよ！レオに命を、そして国王カールに勝利を与えたまえ！ (*Beate Petre, donas vitam Leoni p(a)p(ae), et bictoriam Carulo regi donas*)」⁶⁷

この壁画には、カールの皇帝戴冠を示唆するものは何もない。けれども、この壁画には当時の教皇座が考えていた理念がはっきりと現れていることに注目しなければならない。それはキリスト教世界を支えるのは、フランク王とローマ教皇であるという理念である。シュラムがすでに指摘しているように⁶⁸、このような考え方はすでにハドリアヌスの時代にまで遡る⁶⁹。ビザンツ皇帝を完全に無視し、このような壁画を描かせたところに、カール戴冠前夜の教皇座の基本方針がよく示されている。

さて、このモザイク画よりも教皇座の政治理念をもっと明確に示すのが、『コンスタンティヌスの定め』である⁷⁰。

この有名な偽文書がいつ作られたのかという問題に関しては、古くから諸説があり⁷¹、作成年代はステファヌス2世からハドリアヌス1世の時代まで揺れ動いている。この文書に関する権威のひとり、H・フアマンは作成年代を8世紀後半と推定し、それ以上の年代決定を避けている⁷²。778年にハドリアヌスがカールに送った書簡のなかに、『コンスタンティヌスの定め』を示唆する表現がみられることから、遅くとも778年以前にこの文書が書かれたものと推測される⁷³。この文書を書いたのがローマ教皇に仕える聖職者であったことはほぼ間違いない⁷⁴。作者にこの偽文書を書かせた理由は、ビザンツ帝国から次第に離反しつつあったローマ教皇座の現状を説明することにあった。この文書は、ローマ教皇の政治的立場の強化に直接に用いられたことはなかったように思われる。けれども、その考え方は明らかに8世紀後半のローマ教皇座の基本的立場を表明するものであった⁷⁵。

この偽文書は、5世紀末に書かれた聖シルヴェステル伝をもとに、ローマとビザンツの関係を歴史的な観点から説明しようとする試みであった。聖シルヴェステル伝によれば、コンスタ

ンティヌスが今までの行いを悔い、帝冠を含む皇帝の権標を外し、ローマ教皇シルヴェステルの前に涙ながらにひれ伏した。『コンスタンティヌスの定め』によれば、大帝は「ローマ教会に皇帝の権力と栄光、力、名誉の威厳を与えよう」と願い、ローマ教皇に帝冠を含む皇帝の権標を差し出した。そして、それだけではなく、皇帝は教皇にラテラノ宮殿とローマを含む帝国の西部属州を譲ったのである。コンスタンティヌスはローマ教皇の頭上に帝冠を戴せようとした。しかし、ローマ教皇は帝冠を被ることを拒んだ。こうして、ローマ教皇は自ら皇帝にはならなかったが、コンスタンティヌスから皇帝の地位を委ねられた。ローマ教皇はあらためて、帝冠をコンスタンティヌスに託した。コンスタンティヌスは、「祭司の長であり、またキリスト教の頭」である教皇が君臨するローマに居を定めているのは畏れ多いと考えて、帝国東方に移り、新たな都を帝国東部のビザンティウムに定めた。こうしてビザンツ帝国が始まった。

この偽文書の作者は、当時の人々によく知られていた歴史的事実に反しないように気を配りながら、実に巧みに物語を創作し、ビザンツに対するローマ教皇の優位を示そうと努めた。この偽文書によれば、このキリスト教世界での最高の指導者はローマ教皇であって、ビザンツの皇帝ではなかった。ビザンツの皇帝は聖画像の崇敬を勝手に禁止した。そのような権限はビザンツ皇帝にはあるはずがなかった。全キリスト教徒の最終的な統治権はローマ教皇の手にあるはずであり、それはコンスタンティヌスがローマ教皇に認めたものであった。ローマ教皇は帝冠を大帝から譲り受け、その真の持ち主となったが、ローマ教会の指導に従う限りにおいて、コンスタンティヌスとその後継者たちに皇帝の名とローマ帝国東部の統治権を委ねたのであって、ローマ教皇はビザンツ皇帝からいつでも帝冠を奪い返す権限を有していた。これが、この偽文書の政治理論であった。

教皇レオと彼に近いローマの貴族たちは、自らのイニシアティヴによって、キリスト教世界の再構築を試みようと考えた。その試みとはカールの皇帝戴冠の計画に他ならなかった。ローマ教皇庁の主だった人々は、『コンスタンティヌスの定め』の政治理論にもとづいて、ローマ教皇に皇帝任命権があると考え、実力者カールに皇帝の称号を与えることで、ローマとこの偉大な王との関係をいっそう強化することを望んだ。レオの前任者たちはフランク王に保護者を意味する「パトリキウス」の地位を授けることで、フランク王の関心をローマに向かわせようとした⁷⁶。そして今度は、究極的な地位である皇帝の位をフランク王に授与することで、フランクと教皇座の関係を決定的なものとし、コンスタンティノープルではなく、まさにローマが首都であった時代を蘇らせようとしたのではないだろうか。

この計画は、教皇座にとって、大きなメリットがあった。まず第一に、この計画が実現すれば、フランク王にとって、ローマが以前にもまして重要とならざるをえなかった。カールがローマ皇帝になれば、新しい帝国の中心地はローマになり、新しいローマ帝国はローマを中心として運営されるはずであった。ローマはかつて以上にカールの威光の傘の中に入ることになり、

ローマ教皇座の安定、特にレオにとっては反対派に対する揺るぎなき勝利をもたらすはずであった。第二に、カール戴冠はローマ市民たちに大きな喜びをもたらすものであった。「新しきローマ」であるコンスタンティノープルには皇帝がいるのに、本家ローマには皇帝がいないという、ローマの人々にとっては釈然としない状況によりやく終止符が打たれることになる。ローマは再びキリスト教世界の中心の地位を獲得することができるようになるのである。第三に、実力者カールに対してローマ教皇が理論上優位にたつことができる。その後のキリスト教世界の指導にあたって、ローマ教皇が主導権を握ることが、少なくとも理論的には可能になる。なぜなら、カールを皇帝に任命する権限を有していたのは、ローマ教皇に他ならないからである。カールに皇帝の地位を授けるのはローマ教皇なのである。カール戴冠によって、ローマ教皇とフランク王の関係は変質し、ローマ教皇の立場は以前よりずっと強化されるはずであった。

レオ三世が突然カールの皇帝戴冠を思いついたとは考えにくい。『コンスタンティヌスの定め』が教皇とその周辺の人々の共通認識になっていたと想定してはじめて、なぜ教皇座が皇帝戴冠を着想したのかが理解されよう。

以上に述べたのがローマ側の政治的意図であったとするならば、皇帝戴冠はローマにとっては大きなメリットがあったことになる。苦境にあったレオは、カールを帝位につけることによって、捲土重来を期したのである。しかし、フランク側にはいかなるメリットがあったのだろうか。また、なぜ、カールは皇帝戴冠を受諾したのか。この点を考えるには、いわゆる「アーヘンの皇帝理念」と「キリスト教帝国」の理念について考察しなければならない。

6 「アーヘンの皇帝理念」と「キリスト教帝国」

「アーヘンの皇帝理念」というのは、フランク宮廷の帝国理念を指し示すためにE.E. シュテンゲルが用いた表現である。この概念はその後、エルトマンやボイマンらの中世政治思想史を専門とするドイツの代表的な研究者に受け継がれ、今日に至っている。これらの研究者は、800年以前からフランク宮廷には、フランク王国を中心とする「帝国」の構想があったと考える。そして、アーヘンは「新しいローマ」として、この新しい「帝国」の中心となるべく建設されたのだと解釈するのである⁷⁷。

この学説の最も重要な根拠は、799年にバーダーボルンで行われたローマ教皇とカールの会談の頃にかかれたと考えられていた、かつて『カール大帝とレオ3世』と呼ばれた詩である⁷⁸。このなかでは、アーヘンは「新しきローマ」と表現され、またカールは皇帝（アウグストゥス）と呼ばれている。この史料が本当に同時代にかかれたとするならば、フランク宮廷にはカールの皇帝戴冠を待ち望む思潮があったということになる。だが、はたして、この詩は800年のカール戴冠以前に本当に書かれたものなのであろうか。

以前からこの点に関しては批判がある。たとえば、H・レーヴェは「799年に表明された「アー

ヘンの皇帝権」のプログラムをこの詩の中に見いだそうとしてきたが、その論拠は不十分である。この詩は800年以降に書かれたものであり、新しい状況がこの詩の表現に影響を与えた可能性がある。いや、可能性どころか、その蓋然性は大いにある」と述べて、この詩を799年の史料として用いようとする試みに警鐘を鳴らしている⁷⁹。さらに、この詩が800年以降に書かれたものであることを明快に主張してみせたのが、D. シャラーの画期的な論文である。シャラーは、今までこの詩が799年に書かれたものであることを示す論拠として考えられてきた諸点を逐一検討し、この詩は800年のカール戴冠以降になってはじめて書かれたものであることを示した⁸⁰。ここでシャラーの議論の詳細に触れることは省くが、私は、シャラーの主張は妥当であると考えている。この詩をのぞくすべての同時代史料は、皇帝戴冠以前にカールを「皇帝」と呼んではないし、アーヘンを「新しきローマ」とも呼んでいないのである。これらの表現は、ただ、この詩のみに現れるにすぎない。この詩が戴冠以降に書かれたものであるとするならば、問題点が解消されるのである。「アーヘンの皇帝理念」説は根拠を失ったといわなければならない。

それでは、フランク宮廷では、カールの皇帝戴冠の提案を受け入れる素地は全く欠如していたのであろうか。

その素地はあったのである。その素地とは「キリスト教帝国」の理念に他ならない。この理念は、すでに触れたようにアルクインの書簡にみえる。

アルクインは798年の夏頃、イスパニアで広まっていたキリスト養子説に関する内容を含むカール宛の書簡のなかで、「この不敬な異端が、敬虔なる神が陛下と陛下のご子息たちに統治と支配をお託しになったキリスト教帝国の領域 (*orbis*) に広まる前に、完全に殲滅されますように」と述べている⁸¹。同じ年に書かれたと思われる別の書簡でも「キリスト教帝国」という表現が、「キリスト教が及ぶ地域」という漠然とした意味で用いられている。この書簡では、「キリスト教帝国」という表現と並んで「いとも神聖なる帝国」(*sacratissimum imperium*) という表現がみられる⁸²。また、799年にパーダーボルンの会見の結果を知らされたアルクインは、カールに宛てた礼状のなかで次のように述べている。「陛下が成功を収めればこそ、「キリスト教帝国」は守られ、カトリック信仰は擁護され、正義の規律が全ての者に行き渡るのですから、陛下の美德を祈りをもって称え、また祈りを通じてご援助申し上げることが全ての者にとって大切なことです」⁸³。

以上の用例から、次のように結論づけることができるであろう。アルクインはローマ帝国を直接想起することなく、カトリック信仰の及ぶ範囲という意味で、「キリスト教帝国」という表現を用いた。アルクインにとっては、キリスト教の観点がすべてであり、そこに「ローマ帝国」が入り込む余地はなかった。この点で、カールを「新しきコンスタンティヌス」と呼び、キリスト教帝国としてのローマ帝国を理想的なイメージとして喚起させようとするローマ教皇と、アルクインもその一員であるフランク宮廷の立場は大きく異なっていたといわなければならない。

い。フランク宮廷では、カールが近づくべき理想像は常に旧約聖書の王権であった。アルクインの「キリスト教帝国」はこうしたフランク宮廷の理念の現れであると理解される。フランク宮廷が、特に780年代から宗教に立脚した国づくりを目指したことについては、すでに述べたが、アルクインのこの表現は、この基本政策の到達点を示しているといえよう。そして、この理念こそが、カールが皇帝戴冠を受諾するための基本的な前提となったのだと私は考える。

第三節で述べたように、当時のフランク宮廷の理解によれば、ビザンツ皇帝は異端者であり、カトリックを支える統治者ではなかった。異端者であるコンスタンティノープルの君主が皇帝と称しているのであるならば、カトリックの維持と拡大のための唯一無比の指導者であったカールが皇帝と称してもよいではないか。フランク王国こそが、実質的に唯一の正統的な「キリスト教帝国」ではないだろうか。このような考えが、カールの宮廷に広まっていたとしても不思議ではない。

7 帝国理念の交錯の現れとしての皇帝戴冠式

カールは800年の8月、ついにマインツに軍を集め、ローマへの歩みを開始した。カールはアルプスを越え、イタリアに入り、古都ラヴェンナに到着した。一週間ほど、当地に滞在し、その間、息子のイタリア王ピピンにベネヴェント遠征を命じた。そして、アンコーナでピピンと別れ、カールはローマに向かった。カールが、ローマから12ローマ・マイルほど離れた町メンターナに着くと、そこにはレオが出迎えていた。これは、破格の待遇であるといつてよいであろう。教皇は、カールを皇帝と同格の存在として扱ったのである。774年、781年、787年という3度にわたるローマ遠征において、カールがローマの町の外で教皇の出迎えを受けたことは一度もなかった⁸⁴。

さて、二人は朝食を共にし、それからローマに入城した。一週間後、王は集会を催し、自分がローマを訪れた理由を説明した。王は述べた。自分がローマに来たのは、レオ襲撃事件の真相を明らかにすることであると。カールは強権を発揮しようとはせず、慎重に最善の解決策を探っていた。そして、ほぼ三週間にもわたる調査の末、結論を出した。結局、レオを非難する者たちは有力な証拠を挙げることはできなかった。レオは教会で自分の無実を高らかに宣誓し、レオ襲撃事件は一応の決着をみた。それは12月23日、つまりカール戴冠の前々日のことであった⁸⁵。

『ロルシュ年代記』という史料のみが、23日にカールの戴冠をめぐる問題がローマ教皇を含む人たちの間で論議され、最終的な合意にいたったことを伝えている。この年代記の作者は、ロルシュ修道院長にしてトリアー大司教の職にもあつたりヒボートであった。リヒボートはアルクインの弟子であり、友人であり、この時期のフランク王国の有力な聖職者のひとりである。オーストリアの学者フィヒテナウが詳細な検討から明らかにしたように、この年代記の記述は

十分信頼に足るといってよい⁸⁶。年代記はこの会議のことを次のように述べている。

「皇帝の名は、帝国が一人の女性の手に落ちてしまったビザンツには存在しない。フランク人の王は、その昔、皇帝が居を定めるのを常としてきたローマだけではなく、イタリア、ガリア、ゲルマーニアにあった皇帝の宮廷所在地を掌握している。それは、神がカールに力を与えたからである。皇帝は、司教たちとキリスト教の民の選出にもとづいて神が選ぶべきものである。教皇レオ、この会議に列席したすべての教会聖職者たち、そして他のキリスト教徒を代表する俗人たちは、皇帝の名がカールに与えられるのが正当であると判断した」⁸⁷。

この会議での考え方はこうである。現在唯一皇帝のタイトルを有しているビザンツ皇帝は、伝統に反して女帝であり、しかも帝国に混乱をもたらしており、現在ビザンツにおいて正当な皇帝がいるとはいえない。他方において、西方にはかつての西ローマ帝国とほとんど同じ広さの領土を支配するフランク王カールがいる。カールは、かつてのローマ帝国の首都ローマを統治しているばかりではなく、ラヴェンナ、ミラノ、トリアー、アルルといったかつての西ローマ帝国の拠点をすべて支配下においている。その彼が皇帝を称するのは当然ではないか、というのである。

この主張は、すでにフィヒテナウが指摘しているように、『カールの書』を想起させる⁸⁸。『カールの書』の冒頭に、次のような表現がみられる。「わが主、わが救世主イエス・キリストの御名において。ガリア、ゲルマーニア、イタリア、そしてこれらに隣接する地域を主のご加護によりて治める、光輝き、卓越し、立派な、神の恩寵によるフランク国王カールの書がはじまる。これは、聖画像を崇拜するために愚かで傲慢にもギリシャ地域 (in partibus Graetiae) で開催された公会議に反駁するための書である」⁸⁹。ここで、はっきりと「ギリシャ地域」と呼ばれるビザンツと、ガリア、ゲルマーニア、イタリアを支配するフランク王国が対比されているのである。『ロルシュ年代記』の叙述を信じれば、フランク宮廷は、カールの皇帝戴冠にあたり、すでに『カールの書』で表明されていたフランクの政治的立場を正当化のための大きな理由にしていたように思われる。

しかし、皇帝戴冠はフランク側の思惑通り進行した政治事件だったのであろうか。『ロルシュ年代記』の記述が信頼の置けるものであるとしても、同時にこの記述がフランク側の立場の表明にすぎないことも考慮しなければならない。教皇側の唯一の同時代史料である『教皇列伝』は、この点に一切触れていない。後述するように、『教皇列伝』では、カールが皇帝に推挙された理由として別のことを挙げているのである。

さて、23日に行われた会議で、カールの皇帝推挙が正式に決定された後、25日のクリスマスの日に、ついに皇帝戴冠式が挙行されることになった。即位式のような重要な儀式がクリスマスのような祝祭日に行われることは、よくあったことであったから、クリスマスで戴冠式を行うことが、かなり以前から事実上決定されていたことはありうることである⁹⁰。

では、カールの皇帝戴冠はどのような形でおこなわれたのであろうか⁹¹。この点に関する主要史料は、『フランク王国年代記』と『教皇列伝』である。まず、『フランク王国年代記』の記述を引用しよう。「まさにクリスマスの日のミサの最中に、王が祈りを終え、聖ペトロの墓前から立ち上がったとき、教皇レオがカールの頭上に冠を被せた。すると、すべてのローマの人々から歓呼の声があがった。『神によって冠を授けられ、この世に平和をもたらす偉大な皇帝、アウグストゥス、カールに、命と勝利を！』(*Carolo augusto, a Deo coronato magno et pacifico imperatori Romanorum, vita et victoria!*)。賛歌の後、かつての皇帝たちの習慣に倣って、教皇から跪拝の礼を受けた。そして、これ以降、カールはパトリキウスではなく、皇帝にしてアウグストゥス (*imperator et augustus*) と呼ばれるようになった」⁹²。

一方、『教皇列伝』はこう述べている。「それから、わが主イエス・キリストのご降誕を祝って、皆がサン・ピエトロ教会に再び集まった。寛大なる教皇が王に貴重な冠を被せた。すべての信仰篤きローマ人たちは、神と天の国の鍵をもつ聖ペトロの命にしたがって、王が聖なるローマ教会とその代理人をどれだけ愛し、また守ってきたかを知っていたので、声をあわせて叫んだ。『神によって冠を授けられた敬虔なるアウグストゥス、この世に平和をもたらす偉大な皇帝カールに、命と勝利を！』(*Karolo piissimo Augusto a Deo coronato magno et pacifico imperatore vita et victoria!*)。多くの聖人の名の連呼とともに、聖ペトロの聖なる墓前のままで、彼らは三回叫んだ。こうして、すべての者により、カールはローマ人の皇帝として認められた」⁹³。

次の三点が注目される。

まず第一点は、『教皇列伝』が、カールが皇帝に推挙された理由として、ローマ教皇座に対する支援を挙げていることである。ビザンツとの対抗関係が、前面に強く打ち出されている『ロルシュ年代記』の叙述と対照的である。『教皇列伝』の作者によれば、カールが皇帝に推挙されたのは、カールがローマ教皇座を支えたからに他ならない。『教皇列伝』の作者は、あくまでも教皇座を中心にして、カールの皇帝戴冠を理解しようとするのである。

第二点は、歓呼の文言が、フランク宮廷で国王の出席するミサにおいて用いられたとされる「国王賛歌」(*laudes regiae*)の表現にきわめて類似していることである。伝えられている「国王賛歌」の表現は次のようである。「神によって冠を授けられ、この世に平和をもたらし、偉大な、フランク人とランゴバルト人の王にして、ローマ人のパトリキウスである類い希なるカールに、命と勝利を！」⁹⁴ (*Carolo excellentissimo et a Deo coronato atque magno et pacifico regi Francorum et Langobardorum ac patricio Romanorum vita et victoria!*)。ビザンツ皇帝の称号に影響を受けて作られたと思われる、こうした表現はすでにフランク宮廷において馴染み深いものであった。そしておそらく、カールがローマで列席した数々のミサにおいても用いられていた。このことは、戴冠式の準備に関与したローマ・フランク双方の聖職者が、従来

の伝統を可能な限り配慮したことを示すように思われる。

第三点は、このカールの戴冠式が徹頭徹尾、宗教的な雰囲気の中でおこなわれたことである。このことは、年代記作者の表現にもあらわれている。『サントマン年代記』の「レオは彼を皇帝に聖別した」という表現や、『ロルシュ年代記』の「教皇レオ猊下の聖別 (*consecratio*) により、皇帝の名を得た」という表現は、このことを的確に表現している⁹⁵。ビザンツでは、競馬場に集まった人々による皇帝万歳の歓呼の声こそが、新帝の即位においてもっとも重要であった。しかし、この800年のカールの皇帝戴冠式ではそうではない。なるほど、教会に集まった人々は、おそらく教皇の合図にしたがって歓呼の声をあげた。しかし、カールを新しい皇帝に選んだのはローマ市民ではなかった。新しい皇帝を選んだのは神であり、そしてそのことは皇帝戴冠式がクリスマスの礼拝のなかで行われたことによくあらわれている。

この点については特に、カールの皇帝戴冠式についてのK.J. ベンツの主張に、耳を傾ける必要がある⁹⁶。ベンツは、この時期のローマの典礼史料を比較検討した後、カールの皇帝戴冠式は、ローマの司教叙階式に準拠して行われたと結論づける⁹⁷。彼によれば、当時、ローマではビザンツの即位式を単に模倣するだけでは満足せず、新しい儀式を模索したが、そのなかで新しい儀式の骨格として利用されたのが、ローマの司教叙階式だったというのである。典礼という枠組みの中で行われた皇帝戴冠式のなかで、もっとも重要な行為は、ローマ教皇レオによる加冠であった。教皇は、この戴冠式でもっとも重要な役割を演じた。

全体としてみるならば、皇帝戴冠式はローマとフランクの二つの帝国理念の妥協の産物として理解されるように思われる。ローマ教皇は、戴冠式において中心的な役割を果たすことに完全に成功した。しかし、その一方で、フランク宮廷も、この儀式に従来からの伝統を感じ取ることができたであろう。儀式全体は礼拝の枠組みのなかで行われ、「国王賛歌」で慣れ親しんでいた表現が戴冠式でも用いられていたのである。

おわりに

カールの皇帝戴冠は、宗教国家のヴィジョンを強力に打ち出していたフランク宮廷と、フランク宮廷との関係の強化を望むローマ教皇座の思惑が一致したところに生じた政治事件であった。特に780年代から、民衆教化・聖戦・異端の撲滅を旗印に、新しい国づくりをめざしたフランク宮廷にとっては、皇帝戴冠という教皇からの申し出は、抗しがたい魅力をもっていた。800年の少し前には、カールこそ、キリスト教世界の最高指導者であるとする見方すら、あらわれた。異端を信奉するビザンツの君主が皇帝と称しているのであれば、現実に広大な領土を有し、正統信仰の擁護と拡大のために邁進するフランク国王カールが、皇帝と称しても何の問題があろうか。カールの皇帝戴冠には、フランク宮廷とローマ教皇の「異夢」が重なっていた。両者の思惑が一致したところにはじめて、カールの皇帝戴冠は実現したのである。

ところで、この「異夢」は戴冠後にはどうなったのだろうか。

ローマ教皇は、ある程度は所期の目的を達成したようにみえる。レオの政敵は一掃され、教皇座は少なくとも数年間は安定をとりもどした。しかし、ローマが再び政治的中心としての輝きをとりもどしたかという点、そうではない。カールとフランク宮廷にとって、新しい「帝国」の中心はあくまでもアーヘンであり、ローマではなかった。たとえば、813年にカールは王子ルイを共同皇帝にしたが、カールは戴冠式をアーヘンで挙行了。しかも、ルイに冠を授けたのはローマ教皇ではなく、カール自身であった⁹⁸。だが、もちろん、ローマ教皇はこのような事態を追認するつもりはなかった。教皇は、皇帝の戴冠権は自分にあると、確信を抱いていた。その後の皇帝戴冠にかかわる様々な動きは、このようなフランク宮廷の政治姿勢に対するローマ教皇座の強い警戒感を示している。

フランク宮廷は、現実のものとなった「帝国」をどのように理解したのか。アルクインは相変わらず、カールの戴冠後も、「キリスト教帝国」の理念にこだわり、カール戴冠のローマ的要素をおそらく意図的に無視しようとした⁹⁹。しかし、カールと側近たちは、アルクインよりも、カールが「ローマ帝国」の皇帝になったという事実を重く受けとめたように思われる。カール皇帝戴冠後に発給された証書でのカールの長々しい肩書きは、その現れであろう¹⁰⁰。

いずれにせよ、この「異夢」は、様々な変奏曲を伴って、カロリング朝時代の政治思想に大きな影響を及ぼしたのである¹⁰¹。

註

1. 本稿では、一貫してカールと呼ぶことにするが、彼を「ドイツ人」と考えるからでは、もちろんない。フランス語表記であるシャルルマーニュと呼んでもいっこうにかまわない。彼をカールと呼ぶのは、ただ単にカール大帝という表記のほうがシャルルマーニュよりもわが国では一般的であろうと考えたからにすぎない。この問題については、特に K.F.Werner, *Karl der Große oder Charlemagne?: Von der Aktualität einer überholten Fragestellung* (Bayerische Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-Historische Klasse, Sitzungsberichte, Jg.1995, Heft 4), München 1995 および拙著『地上の夢・キリスト教帝国―カール大帝の<ヨーロッパ>―』講談社、2001年、17頁以下参照。
2. W. Braunsfels (Hg.), *Karl der Große. Lebenswerk und Nachleben*, 5 Bde., Düsseldorf 1965-67.
3. 794- *Karl der Große in Frankfurt am Main : Ein König bei der Arbeit*, Sigmaringen 1994; vgl. L. E. Saurma-Jeltsch (Hg.), *Karl der Große als vielberufener Vorfahr : Sein Bild in der Kunst der Fürsten, Kirchen und Städte*, Sigmaringen 1994.
4. Ch. Stiegemann und M. Wemhoff, 799 - *Kunst und Kultur der Karolingerzeit*.

- Beiträge zum Katalog der Ausstellung*, 3 Bde., Mainz 1999. また、J.Meyer zu Schlochtern und D.Hatrup (Hg.), *Geistliche und weltliche Macht: Das Paderborner Treffen 799 und das Ringen um den Sinn von Geschichte*, Paderborn 2000; P.Butzer, M.Kerner und W.Oberschelp (Hg.), *Karl der Große und seine Nachwirken. 1200 Jahre Kultur und Wissenschaft in Europa, Bd.1, Wissen und Weltbild*, Turnhout 1997.
5. M.Kramp (Hg.), *Krönungen: Könige in Aachen - Geschichte und Mythos*, Mainz 2000.
 6. R.Collins, *Charlemagne*, London 1998.
 7. J.Favier, *Charlemagne*, Paris 1999; I.Gobry, *Charlemagne: Fondateur de l'Europe*, Monaco 1999.
 8. M.Becher, *Karl der Große*, München 1999; M.Kerner, *Karl der Große, Entschleierung eines Mythos*, Köln-Weimar-Wien 2000. D.Hägermann, *Karl der Große: Herrscher des Abendlandes*, Berlin/ München 2000.
 9. たとえば、中世初期の教会法および勅令(カピトゥラリア)の権威として名高いH. モルデクが「カール大帝は野蛮な征服者か、それともヨーロッパの建設者か」という興味深い題の小論を発表しているのは印象的である。H.Mordek, *Karl der Große - barbarischer Eroberer oder Baumeister Europas?*, in: *Deutschland in Europa. Ein historischer Rückblick*, hg. v. B.Martin, München 1992, S.23-45; vgl. F.-R. Erkens, *Karolus Magnus - Pater Europae?*, in: *799 - Kunst und Kultur der Karolingerzeit*, Bd.1, S.2-9.
 10. 渡辺金一「8-9世紀初頭のビザンツ帝国とフランク王国」『世界歴史7』岩波書店、1969年、277頁以下。出崎澄男「カール大帝の戴冠をめぐる諸問題」『ヨーロッパ・キリスト教史』(糸永寅一他監修)中央出版社、1971年、303-352頁。前掲拙著『地上の夢・キリスト教帝国-カール大帝の<ヨーロッパ>-』156頁以下でも、カールの皇帝戴冠の問題をとりあげたが、一般書という性格上、詳しく論じることはできなかった。なお、最近、日置氏が、本稿の問題意識とも通ずるとされる論文を発表している。日置雅子「フランクフルト宗教会議(794)とカールの皇帝戴冠(800)」(その1)『愛知県立大学外国語学部紀要(地域研究・国際学編)』第33号、2001年、103-126頁。
 11. カールの帝国理念に関する問題を研究史的に整理したものとして、P.R.Máthé, *Studien zum früh- und hochmittelalterlichen Königtum*, Diss. Bern 1969, S.125-129を挙げることができる。なお、出崎、前掲論文に戴冠研究史が見事にまとめられている。
 12. K.Heldmann, *Das Kaisertum Karls des Großen. Theorien und Wirklichkeit*, Weimar 1928; P.E.Schramm, *Kaiser, Könige und Päpste. Gesammelte Aufsätze zur Geschichte des Mittelalters*, Bd.1, Stuttgart 1968, S. 193-302; H.Fichtenau, *Karl der Große und das Kaisertum*, *Mitteilungen des Instituts für österreichische Geschichtsforschung*

- 61 (1953), S.257-334; Ders., *Das karolingische Imperium: Soziale und geistige Problematik eines Großreiches*, Zürich 1949 (*The Carolingian Empire*, trans. P.Munz, New York 1964); F.L.Ganshof, *The Imperial Coronation of Charlemagne: Theories and Facts*, in: Ders., *The Carolingians and the Frankish Monarchy*, London 1971, S. 41-54.
13. R.Folz, *Le couronnement impérial de Charlemagne*, Paris 1964 (邦訳、大島誠編訳、『シャルルマーニュの戴冠』、白水社、1986年)。
14. P.Classen, *Karl der Große, das Papsttum und Byzanz*, Sigmaringen 1985. この遺稿のもととなる論文は、すでに1965年に書かれている (in: Braunfels (Hg.), *Karl der Große*, Bd.1, S. 537-608)。クラッセンはそれを増補し、1968年に単著として出版した。クラッセンはその後、1981年に *Italien zwischen Byzanz und dem Frankenreich* の題でスポレトの研究集会で研究発表を行った (in: *Settimane di Studio sull'Alto Medioevo in Spoleto* 27(1981), Bd.2, S.919-971=Ders., *Ausgewählte Aufsätze*, hg.v. J.Fleckenstein, 1983, S.85-115)。その研究成果を踏まえて、クラッセンは単著の改訂を望んでいたようだが、早すぎる死によって果たされなかった。したがって、この遺稿は著者が遺した草稿のもとに編集されたものである。
15. H.Fichtenau, *Das karolingische Imperium*, S.55ff.; Schramm, *a.a.O.*, S.253f.; Folz, *L'Empire*, S.35, S.188; E.Ewig, *Zum christlichen Königsgedanken im Frühmittelalter*, in: Th.Mayer (Hg.), *Das Königtum*, Konstanz 1956, S. 66.
16. G.Tellenbach, *Römischer und christlicher Reichsgedanke in der Liturgie des frühen Mittelalters*, in: ders., *Ausgewählte Abhandlungen und Aufsätze*, Bd.2, Stuttgart 1988, S.343-410 (Erstdruck in: *Sitzungsberichte der heidelberger Akademie der Wissenschaften, Philosophisch-historische Klasse*, Jahrgang 1934/35, 1. Abhandlung. Heidelberg 1934, S.3-71).
17. *A.a.O.*, S. 363f.
18. E.E.Stengel, *Imperator und Imperium bei den Angelsachsen: Eine wort- und begriffsgeschichtliche Untersuchung*, in: Ders., *Abhandlungen und Untersuchungen zur Geschichte des Kaisergedankens im Mittelalter*, Köln -Graz 1965, S.325-38; vgl. R.Drogereit, *Kaiseridee und Kaisertitel bei den Angelsachsen*, *Zeitschrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte, Germanistische Abteilung* 69 (1952), S.24 -73.
19. S.Fannig, *Bede, Imperium, and the Bretwaldas*, *Speculum* 66 (1991), S. 1-26.
20. C.Erdmann, *Die nichtrömische Kaiseridee*, in: Ders., *Forschungen zur politischen Ideenwelt des Frühmittelalters*, Berlin 1951, S. 1-51.

21. H.Mayr-Harting, Charlemagne, the Saxons, and the Imperial Coronation of 800, *English Historical Review* 111 (1996), S. 1113.
22. J.Fried, Papst Leo III. besucht Karl den Großen in Paderborn oder Einhards Schweigen, *Historische Zeitschrift* 272 (2001), S.281-326. フリートの主張にもかかわらず、この『ケルンの覚え書』(Kölner Notiz)が、800年以前に書かれたという主張を裏付ける論拠は、現在の研究状況にあつては、十分ではないように思われる。この覚え書の史料価値の検討は、なお今後の研究に委ねられているというべきだろう。なお、『ケルンの覚え書』に関する基礎的研究として、H.Löwe, Eine Köner Notiz zum Kaisertum Karls des Großen, *Rheinische Vierteljahrsblätter* 14 (1949), S.7-34がある。
23. 本稿の意図は、以上に述べた視点から、カールの皇帝戴冠問題を再検討し、問題を提起することにある。ここで論じることのできない多くの論争点があることを予めお断りしておかなければならない。少し古いが、ヴォルフ編のアンソロジー (G.Wolf (Hg.), *Zum Kaisertum Karls des Großen*, Darmstadt 1972) は、カール戴冠問題に関する研究の到達点と論争点を明らかにするのに役立つ。
24. Alcuin, *Epistolae* (MGH Ep.IV, hg.v.E.Dümmeler, Berlin 1895) [以下 Ep. と略記] Nr.202, S.336.
25. カールは、このイングランド生まれの聖職者と、780年代になってはじめてイタリアで出会った。カールはアルクインの能力をただちに見抜き、フランク宮廷に招聘した。アルクインは一度イングランドに戻ったが、結局カールの招請を受諾し、その後カールの有力なブレーンとなった。アルクインがカールの政治行動に与えた影響に関してはいろいろな意見があるが、少なくとも、アルクインがイングランドへ一度帰国する780年代末頃までは、アルクインがカールの施策と政治理念に大きな影響を与えたことは否定できない。たとえば、本論で述べたように、民衆教化、異端の撲滅、聖戦を骨子とする<キリスト教帝国>のイメージはカールの重要な政治理念となっていたが、この理念は、アルクインがカールの宮廷にあった780年代以降になってはじめて、史料上確認されるのである。それは、はたして偶然であろうか。
26. Alcuin, Ep.Nr.41, S.84; vgl.L.Wallach, *Alcuin and Charlemagne*, Ithaca/New York 1959, S.15.
27. この勅令については一般に以下の文献を参照。R.McKitterick, *The Frankish Church and the Carolingian Reforms, 789-895*, London 1977, S.1-6; Th.M.Buck, *Admonitio und Praedicatio*, Frankfurt a. M.1997, S.67-156. 拙稿「カロリング朝の民衆教化－その理念と現実－」『西洋史学』147号、1987年。多田哲「カロリング王権と民衆教化－『一般訓令』(789年)の成立事情を手懸りに」『西洋史学』178号、1995年。

28. MGH Cap.I, Nr.22, S.54.
29. Einhard, *Vita Karoli*, c.7 (MGH SS.rer.Germ., hg.v. O.Holder-Egger, Hannover 1911), S.9 (邦訳、國原吉之助訳『カロルス大帝伝』、筑摩書房、1988年、15頁)。
30. 「イルミン聖柱」については、以下の文献を参照。H.Löwe, *Die Irminsul und die Religion der Sachsen*, *Deutsches Archiv* 5 (1943), S.1-22; L.E.von Padberg, *Das Paderborner Treffen von 799 im Kontext der Geschichte Karls des Großen*, in: W.Hentze (Hg.), *De Karolo rege et Leone papa*, Paderborn 1999, S.15f.
31. A.Kleinclausz, *Alcuin*, Paris 1948, S.123-137.
32. Alcuin, Ep.Nr.7, S.32.
33. Alcuin, Ep.Nr.121, S.176; vgl. Nr.171, S.262.
34. *Libri Carolini*, C.I6 (MGH Concilia II. Supplementum I, hg.v. A.Freemann, Hannover 1998) [以下 LC と略記] , S.136.
35. これらの論争について、一般に H.Nagel, *Karl der Große und die theologischen Herausforderungen seiner Zeit*, Frankfurt a.M. 1998 参照。
36. Classen, *a.a.O.*, S.30f.
37. この有名な文書については、前節注(13)に挙げたように、今日 A.Freemann の編集による MGH の新版がある。この新版は、H.Bastgen による旧版を完全に置き換えた。なお、この文書は一般に『カールの書』(*Libri Carolini*) と呼ばれているが、このタイトルは文書自体にはない。A.Freemann は、この文書を『教会会議 [第二ニケーア公会議] に対する国王カールの反論』(*Opus Carolini Magni contra synodum*) と呼ぶことを提案している。Freemann, *Carolingian Orthodoxy and the Fate of the Libri Carolini*, *Viator* 16 (1985), S. 65, Anm.1; ders., Art. *Libri Carolini*, in: *Lexikon des Mittelalters*, Sp.1953.
38. これは W.von den Steinen, *Entstehungsgeschichte der Libri Carolini*, *Quellen und Forschungen aus italienischen Archiven und Bibliotheken* 21 (1929/30), S.20ff. のかなり説得力をもった主張にもとづいている。
39. 同時代の『ヨーク年代記』の記述 (MGH SS XIII, S.155) 参照。これは、フランクではなく、イングランドの年代記であるが、この時期にアルクインがイングランドに滞在していたことを考えれば、この史料の価値はただちには無視しえない。
40. E.Ewig, *Das Zeitalter Karls des Großen (768-814)*, in: *Handbuch der Kirchengeschichte*, Bd.3/1, Freiburg-Basel-Wien 1966, S. 94.
41. フリーマンは数々の精緻な論考を通じて、この書物の実質的な作者がテオドゥルフであることを突き止めた。たとえば、A.Freeman, *Theodulf of Orléans and the Libri Carolini*, *Speculum* 32 (1957), S.663-705; vgl. P.Meyvaert, *The Authorship of the*

- Libri Carolini, *Revue bénédictine* 89 (1979), S.29-57.
42. MGH Ep.V, hg.v. E.Dümmler, Berlin 1899, S.56.
43. 793年にローマ教皇はフランクに使節を派遣した。Annales regni Francorum [以下ARFと略記] a.793 (MGH SS rer.Germ.hg.v.G.H.Pertz, Hannover 1895), S.92,94. おそらく、このとき教皇の親書が手渡された。
44. Wallach, *a.a.O.*, S.174.
45. この文書の全文を記している写本は、9世紀後半にランス大司教ヒンクマールのために作成されたものだけである (*Paris, Bibliothèque de l'Arsenal*, 663)。状態のよい写本としては他にヴァティカン本 (*Vat.lat.7207*) を挙げることができるにすぎない。
46. 『カールの書』に含まれるフランク宮廷の政治理念については、E.Caspar, *Das Papsttum unter fränkischer Herrschaft, Zeitschrift für Kirchengeschichte* 54 (1935), S.196ff.; Fichtenau, *Karl der Große und das Kaisertum*, S.276-287; N.Staubach, *Cultus divinus und karolingische Reform, Frühmittelalterliche Studien* 18 (1984), S.546ff. を参照。しかし、この文書の政治思想史上の位置づけに関する全体的な研究は、今後の研究課題としてなお残されている。
47. LC, Praefatio, S.98.
48. LC, c.1, S.105-115. この書簡についてはLC, c.1, S.105 Anm.61におけるFreemanの解説参照。
49. LC, c.1, S. 105.
50. LC, c.1, S. 124-128.
51. アルクインは彼の旧友であるザルツブルク大司教アルノからローマ教皇座の混乱を知った。798年11月にアルノに送った手紙のなかで、彼はこの事件に触れている。Alcuin, Ep.159, S.258. ただし、W.Heil, *Alkuinstudien* 1, Düsseldorf 1970, S.34によれば、この書簡が書かれたのは799年の春である。この説が正しければ、教皇座の混乱の表面化は799年を待たなければならないことになる。
52. ARF, a.801, S.114. 教皇座のこれらの役職については、Noble, *a.a.O.*, S.223-225 参照。どちらの役職も教皇庁の高位の役職であった。なお、書記長、財務長官という訳語は、試訳にすぎない。
53. この事件については、特に以下の文献を参照。Classen, *a.a.O.*, S.42-47.; H.Zimmermann, *Papstabsetzungen des Mittelalters*, Graz 1968, S. 25-36; W.Mohr, *Karl der Große, Leo III. und der römische Aufstand von 799, Bulletin du Cange, Archivum Latinitatia Medii Aevi* 20 (1960), S.39-98.
54. Liber pontificalis [以下LPと略記] Bd.2, 1955, hg.v.L.Duchesne, c.12, S.4.

55. ARFa.799,S.106; J.F.Böhmer, *Regesta Imperii* I,neubearbeitet von E.Mühlbacher und J.Lechner, 2.Aufl. Innsbruck 1908 [以下 BM と略記] 348b.
56. LP. 2,c.16.S.6.
57. Alcuin, Ep.174, S.287-289. ローマの事件を知らされたアルクインは、ザクセンと和睦して教皇座の騒擾の鎮圧に乗り出すように、カールに提言している。
58. Alcuin, Ep.177, S.292.
59. BM 350a.
60. Ep.174, S. 288 (フォルツ『シャルルマーニュの戴冠』126頁における大島誠氏の訳を用いた)。この書簡の日付に関しては、Classen, *a.a.O.*, S. 46, Anm.154.
61. Vgl.Classen, *a.a.O.*,S.47.
62. たとえば,Beumann, Das Paderborner Epos, in: Ders., Wissenschaft vom Mittelalter, Köln-Wien 1972, S.313; Folz, *a.a.O.*, S.150; Classen,*a.a.O.*,S.52; W.Schlesinger, Kaisertum und Reichsteilung. Zur Divisio regnorum von 806, in: Ders., *Beiträge zur deutschen Verfassungsgeschichte des Mittelalters* 1, Göttingen 1963, S.216; Collins., *a.a.O.*, S.147.
63. J.Deér, Die Vorrechte des Kaisers in Rom (772-800), in: Wolf (Hg.), *a.a.O.*,S.78-83.
64. *Gesta episcoporum Neapolitanorum*.c.48 (MGH SS rer.Langobardicarum), S.428.
65. Einhard, *Vita Karoli* c.28 (MGH SS rer.Germ.), S.32.
66. Collins, *a.a.O.*, S. 144.
67. H.Belting, Die beiden Palastaulen Leos III. im Lateran und die Entstehung einer päpstlichen Programmkunst, *Frühmittelaltlerliche Studien* 12 (1978), S.55-83; M.Luchterhandt, Famulus Petri: Karl der Große in den römischen Mosaikbildern Leos III.,in: 799; *Kunst und Kultur der Karolingerzeit*, Bd.3, S.55-70; von Padberg, *a.a.O.*, S.84ff.
68. Schramm, *a.a.O.*, S. 232f.
69. MGH Poeta.lat. I, Nr.13, S.106.
70. *Constitutum Constantini*, hg.v.H. Fuhrmann, (MGH fontes iuris germanici antiqui in usum scholarum separatim editi,10) Hannover 1968. なお、この文書は『コンスタンティヌスの寄進状』という名で呼ばれることも多い。
71. 1984 年までの主要論文は、Noble, *a.a.O.*, S. 135 Anm.173 に網羅されている。
72. Fuhrmann, Das frühmittelalterliche Papsttum und die Konstantinische Schenkung: Meditationen über ein unausgeführtes Thema, *Settimane di Studio sull'Alto Medioevo in Spoleto* 20 (1973), S.263-264.

73. Ewig, *Handbuch der Kirchengeschichte*, Bd.1, Freiburg 1966, S. 69f. ボイマンは、この書簡が書かれた778年に、教皇ハドリアヌスはカールに『コンスタンティヌスの定め』を送ったと推測しているが (Beumann, *a.a.O.*, S.341)、その根拠は十分ではない。
74. Fuhrmann, *a.a.O.*, S.264; Ullmann, *The Growth of Papal Government in the Middle Ages: A Study in the Relation of Clerical to Lay Power*, London 1955, S. 74, Anm.2.
75. 『コンスタンティヌスの定め』の政治理念をもっとも鋭く分析しているのが、Ullmann, *a.a.O.*, S.74-86の記述である。
76. 「パトリキウス」をめぐる問題については、ここでは立ち入ることができない。この問題については、特にJ.Deér, *Zum Patricius-Romanorum-Titel Karls des Großen*, in: Wolf (Hg.), *a.a.O.*, S.240-308参照。なお、邦文では、渡辺金一「《Patricius Romanorum》称号の解釈をめぐる論争」『一橋論叢』38-1, 1957年、83-90頁、がある。
77. Stengel, *Der Heerkaiser*, *Studien zu Geschichte eines politischen Gedankens*, in: Ders., *Abhandlungen und Untersuchungen*, S.78; Erdmann, *a.a.O.*, S.16ff.; Beumann, *a.a.O.*, S. 304ff.
78. *De Karolo rege et Leone papa*, Text und Übersetzung v. F.Brunhölzl, Paderborn 1999(= *Karolus Magnus und Leo Papa. Ein Paderborner Epos vom Jahre 799*, hg.v.J.Brockmann, Paderborn 1966, S.57-97).
79. H.Löwe, *Deutschlands Geschichtsquellen*, Bd.2, Weimar 1953, S. 243f. クラッセンもすでに、この詩の創作時期については慎重な検討が必要であると認めている。Classen, *a.a.O.*, S.53f.
80. D.Schaller, *Das Aachener Epos für Karl den Kaiser, Frühmittelalterliche Studien* 10(1976), S.134-168(= Ders., *Studien zur lateinischen Dichtung des Frühmittelalters*, Stuttgart 1995, S.129-163, Nachträge, S.419-422); vgl. Ch.Ratkovitsch, *Karolus Magnus - Alter Aeneas, alter Martinus, alter Iustinus: Zu Intention und Datierung des „Aachener Karlsepos“*, Wien 1997. ついでに言えば、シャラーはこの詩の作者はアインハルトではないかと推定している。しかし、これに対して、Fried, *a.a.O.*, S. 287 Anm.12. なお、シャラーは、『カール大帝と教皇レオ』(*Karolus magnus et Leo Papa*) という名称は誤りであると指摘している。この名称をつけたのは、MGHの編纂者であるデュムラーであるが、実のところ、詩の中にあらわれる表現(v.532)では *magnus* はLeoを修飾しているのである(S.168, Anm.169)。したがって、今日多くの研究者は、この名称を避ける傾向にある。これについては、たとえば、A.T.Hack, *Das Zeremoniell des Papstempfangs 799 in Paderborn*, in: *799- Kunst und Kultur der Karolingerzeit*, Bd.3, S.31.
81. Ep.148, S.241.

82. Ep.136, S.205.
83. Ep.177, S.292.
84. この点に関しては、註 63 に挙げた Deér の論文参照。
85. このように、カールは、ローマ滞在の目的はレオ襲撃事件の法的決着にあると明言していた。このことから、この裁判とカールの皇帝戴冠を関連づける研究が古くから存在している。たとえば、E.Sacker, *Ein römischer Majestätsprozeß und die Kaiserkrönung Karls des Großen*, *Historische Zeitschrift* 87 (1901), S.385-406; K.Heldmann, *a.a.O.*, S.239f. これらの研究によれば、ローマ法では大逆罪を科すことができたのは皇帝だけであったから、大逆罪で首謀者たちを裁こうと考えた教皇レオと支持者たちが、カールの皇帝戴冠を思いつき、実行に移そうとしたのだとする。しかし、この問題を詳細に検討したハーゲネーダーは、これらの研究に批判的である(O.Hageneder, *Das crimen maiestatis, der Prozeß gegen die Attentäter Papst Leos III. und die Kaiserkrönung Karls des Großen*, in: *Aus Kirche und Reich. Studien zu Theologie, Politik und Recht im Mittelalter. Festschrift für F. Kempf*, Sigmaringen 1983, S.55-79)。
86. Fichtenau, *a.a.O.*, S. 287ff.; vgl. Classen, *a.a.O.*, S.60f.
87. *Annales Laureshamenses* (MGH SS I), S.38.
88. Fichtenau, *a.a.O.*, S.320.
89. LC, Praefatio, S.97.
90. H.M.Schaller, *Der heilige Tag als Termin mittelalterlicher Staatsakte*, *Deutsches Archiv* 30 (1974), S.1-24.
91. Classen, *a.a.O.*, S.62-70 において、戴冠式の式次第が詳しく分析されている。
92. ARF a .801, S.113.
93. LP .2, c.23, S.7.
94. H.Kantorowicz, *Laudes regiae. A Study in Liturgical Acclamations and Mediaeval Ruler Worship*, Berkeley/Los Angeles 1946, S.15.
95. *Annales Sancti Amandi* (MGH SS I),S.44; *Annales Laureshamenses*(MGH SS I), S.38.
96. K.J. Benz, >Cum ab oratione surgeret<. Überlegung zur Kaiserkrönung Karls des Großen, *Deutsches Archiv* 31 (1975), S.337-369.
97. *A.a. O.*, S. 362f.
98. W.Wendling, *Die Erhebung Ludwigs des Frommen zum Mitkaiser im Jahre 813 und ihre Bedeutung für die Verfassungsgeschichte des Frankenreiches*, *Frühmittelalterliche Studien* 19 (1985), S.201-238.

99. Classen, *a.a.O.*, S.77-79.

100. *Karolus serenissimus Augustus a deo coronatus magnus pacificus imperator Romanum gubernans imperium qui et per misericordiam dei rex Francorum et Langobardorum*. この称号がはじめて用いられたのは801年5月29日にボロニャで発給された証書 (MGH DD Kar. Nr.197) においてである。これは、戴冠後にカールが発給した最も古い証書であるが、戴冠後すでに半年が経過している。これ以前の証書は残念ながら伝承されていない。したがって、カールが新しい称号を決定するまで、長期にわたる熟考を要したのかどうかは、断言できない。この称号については以下の文献を参照。P.Classen, *Romanum gubernans Imperium*, *Deutsches Archiv* 9 (1952), S.103-131 (= Ders., *Ausgewählte Aufsätze*, hg.v. J.Fleckenstein, Sigmaringen 1983, S.187-204); H.Wolfram, *Intitulatio II*, Wien/Köln/Graz 1973, S.19-52.

101. カール死後の帝位の行方については、H.K.Schulze, *Grundstrukturen der Verfassung im Mittelalter*, Bd.3: *Kaiser und Reich*, Stuttgart/Berlin/Köln 1998, S.158ff.の記述を参照。

Verflechtung der Kaiserideen: Nochmals zur Kaiserkrönung Karls des Großen

IGARASHI Osamu

Das Thema über die Kaiserkrönung des Karls des Großen ist in allen Teilaspekten seit sehr langer Zeit diskutiert worden. Doch gibt es einen Aspekt, worauf man bisher nur wenig geachtet hat, d.h. die Regierungsidee vor seiner Kaiserkrönung. Karl verstand seine Königsherrschaft als einen göttlichen Auftrag und wollte seine Politik begriffen sehen als Sorge um die christliche Gottesverehrung. Seine Regierungsidee besteht hauptsächlich aus drei Bestandteilen: Volksbelehrung, Vernichtung der Häresie, und dem Heiligen Krieg.

Diese Regierungsidee spielte eine große Rolle bei der Kaiserkrönung Karls in zwei Punkten: 1. Die Franken gerieten in die endgültige Auseinandersetzung mit Byzanz, weil Karl sich als Verfechter des rechten Glaubens bewußt war. 2. Dieser politische Grundsatz führte zu Alkuins Vorstellung, dem *imperium christianum*.

Die große Rolle des Papsttums bei der Kaiserkrönung ist allerdings nicht umstritten. Es ist ganz deutlich, daß Papst Leo III. Karl dem Großen die Kaiserkrönung vorschlug. Ich vermute, daß er sich dabei auf das *Constitutum Constantini* berief.

Hier soll versucht werden, Karls Kaisererhebung als Verschmelzung der drastischen Theokratie Karls des Großen mit den politisch-theologischen Ideen des Papsttums zu verstehen.